



佳作

書評 伊藤一彦編 『若山牧水歌集』 (岩波書店, 2004)

(中央新書・文庫コーナー: 岩波文庫 緑(31)-052-1)

経営学部3年 新野孝駿

「白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ」という歌は、若山牧水の名前を知らない人でも耳にしたことのある人は多いのではないのでしょうか。本書はこの歌を始めとして、旅と酒を愛した歌人・若山牧水の秀歌約1700首を収めた作品集です。本書で取り上げられていることは、旅や自然、恋愛やお酒などを通して紡がれている牧水的心情や見た風景です。それは、どこか懐かしく切ない気持ちとともに旅の思いを読む人に訴えてきます。

歌人、若山牧水とはどのような人なのか。彼の人となりについては、彼の作品が全てを語りつくしています。北海道から沖縄、朝鮮まで短歌を詠み、揮毫しながらの旅に明け暮れた若山牧水。「酒仙の歌人」と称され、旅と自然とともにお酒をこよなく愛した漂泊の歌人としての若山牧水。人妻との恋に苦悩しながら情熱的な恋をした若山牧水。本書は、そのような若山牧水の15冊ある歌集に収録されている約6900首のうちから、約1700首を発表順に収録しています。彼の作品を追っていくうちに、人口に膾炙した若山牧水という国民的歌人の心情や風景が私たちの心に想起されていきます。私たちは今、若山牧水的心情や見た世界を本人に会って知る術はありません。本書はそんな私たちに、短歌を通して、100年前に生きた一人の若山牧水という歌人の心情や見た世界を生々しく伝えてくれています。

本書は小説でも漫画でもなく、一つの短歌集です。解説や批評もなく、詠み手の伝えたいことは、約31字のみの短歌で描写されています。素晴らしい景色を見た感動や、美味しいお酒を飲んだときの喜び、そして恋に心が掻きまわられそうになったとき狂おしさといった心情さえも、絵も用いずに、31字の文字のみで描かれています。余計な描写はそこにはありません。あるのは唯一、詠み手が限界まで突き詰めて伝えたかった言葉のみ。31文字のみで、旅をした場所のこと、感じたことが描かれているのです。仰々しく修飾された表現はそこにはなく、流暢な言葉の旋律や寂しい余韻がアクセントとしてあるばかりです。それゆえ、彼の作品は、自然を深く愛し、人情の機微に繊細で、哀韻余情を好む人の心に響いてくるのかも知れません。また、31字に事象を捨象して作品を描いていたからこそ、私たちの共感を呼び、日本人としての普遍的な感性のようなものを感じさせてくれているのかもしれない。

本書は何も考えずに素直に読み進めても十分に楽しめる作品です。旅に恋に酒に生きた一人の天才歌人が詠う短歌の傑作編として、手に持って旅に出ることもできます。「幾山河越えさり行かば寂しさの 果てなむ国ぞ今日も旅ゆく」と、どこか懐かしさを感じて切なくなる歌を追いながら、100年ほど昔の人が旅した我が国の地を踏みしめてみるのも良いかもしれません。また、目を閉じて、精巧な筆致で紡がれた日本各地の旅の風景をコンクリートの中で思い浮かべてみるのも良いかもしれません。100年の時を経てもなお、読む人に「旅情」を強く感じさせてくれるのです。